

行動的 QOL はどの程度 Quality of Life を表現しているのか？

To what extent does behavioral QOL illustrate Quality of Life?

○高山仁志^{*1}・中鹿直樹^{*2}

Hitoshi TAKAYAMA^{*1}, Naoki NAKASHIKA^{*2}

立命館大学人間科学研究科^{*1}・立命館大学総合心理学部^{*2}

Graduate School of Human Science, Ritsumeikan University^{*1}・ College of Comprehensive Psychology, Ritsumeikan University^{*2}

Key words: 行動的 QOL, Quality of Life, 二人称的アプローチ

目的

個人や個体の福祉向上の実践における重要な概念に、Quality of Life (以下、QOL とする) がある。QOL には大きく分けて、主観的 QOL と物理的 (客観的) QOL の 2 つがあり、個人の社会的生活の質を主観と客観の 2 つの軸で測ろうとする概念である。しかし、現在の QOL の研究は多岐に渡っており、QOL の統一的な評価や QOL を高める条件が明確に示されているとは言い難い (村山, 2017)。

また、QOL の向上は対人援助・支援の領域における作業目標のひとつでもある。支援の現場では、「評価のための概念」だけでなく、実践作業の指針も内包した「実践のための概念」も必要といえる。

個人・個体の QOL の測定と向上を目的とした概念に、「行動的 QOL」(望月, 2001) がある。行動的 QOL は、「正の強化で維持される行動の選択肢の拡大」という一言でそのミッションが定義されている。個人の生活の質を正の強化で維持される行動の選択肢の数によって評価し、拡大させていこうとする概念である。行動的 QOL を導入した実践はいくつかの報告があるが、いずれも行動的 QOL がどの程度 QOL を表し得るのかについて、検討されてはいない。また、高山・中鹿(2021)では、行動的 QOL を導入した実践における重要な点について述べられているものの、行動的 QOL の妥当性については述べられていない。また、武藤(2016)は対人援助実践において、二人称の科学的なアプローチの重要性を主張しているが、行動的 QOL を導入した実践や、行動的 QOL の基礎である応用行動分析は、まさにこの二人称的アプローチといえよう。そこで本研究では、新田(2019)が示した 4 段階のレベルで分類された QOL の主観指標・客観指標に基づき、行動的 QOL を導入した実践がどの程度個人の QOL の向上に資することがについて検討する。

方法

新田(2019)で示されている、マイクロレベルの QOL 指標である、健康関連 QOL および ADL と、行動的 QOL の共通点について考察する。また、武藤(2016)のいう二人称的アプローチについて概観し、行動的 QOL を導入

した実践 (応用行動分析) について、このアプローチから考察する。

結果と考察

新田(2019)が分類しているマイクロレベルの指標である健康関連 QOL、ADL (I-ADL) のどちらにも共通しているのが、個人の生活における個人の“できる (できること、できていること)”によって、QOL を測定・評価しようとしている点である。すなわち、マイクロ (個人) レベルの QOL の測定とは、個人と環境との相互作用である“できる”の度合いを、主観的な評価と、客観的な評価の 2 軸で捉えようとする試みであるといえる。さらに、マイクロレベルの QOL とは、個人・個体が生きている環境においてどのような状態であるかを測ろうとする概念である。つまり、個人差・個体差があることが前提であり、個人差・個体差をできる限り除外する三人称的なアプローチはそぐわなと考えられる(武藤, 2016)。

行動的 QOL の「正の強化で維持される行動」とは、まさに個人の“できる”であるといえよう。そして、行動的 QOL (応用行動分析) における“行動”とは、【先行条件・反応・強化子】という、三項随伴性で表現される生体と環境との相互作用を指す。すなわち、行動的 QOL は個人と環境との相互作用である“できる”を、主観と客観に還元するのではなく、相互作用のまま QOL の評価と向上に用いているといえる。以上のことから、行動的 QOL は個人・個体の QOL の評価および向上の実践において機能するといえよう。

参考文献

- 望月昭(2001). 行動的 QOL: 「行動的健康」へのプロアクティブな援助 行動医学研究, 7, 8-17.
- 武藤 崇 (2016). 対人援助学の方法論としての「二人称」の科学. 対人援助学研究, 5, 1-12.
- 新田功(2019). 福祉測定の歴史と理論 QOL 研究の学際的総括と展望. 白桃書房
- 高山仁志・中鹿直樹(2021). 行動的 QOL に基づく支援とはどのような実践か 対人援助学研究, 11, 48-59.